私のテーマ

龍馬史料を修理して
～龍馬書簡と血染めの掛け軸

国宝修理装潢師連盟 名誉会員
鈴木　裕

私は文化財修理技術者として、長年、国宝重要文化財をはじめとする文化財の修理を行ってきた。

坂本龍馬の手紙と掛け軸

平成27年、29年と続けて坂本龍馬直筆の書簡を修理する機会を得た。坂本龍馬記念館前田由紀枝学芸課長には、何度か工房のある京都国立博物館文化財保存修理所に修理監督のため足を運んでいただいた。書簡本紙（ほんし＝表装の修理を行う者は絵や書をこう呼ぶ）の修理方針や、表装（本紙の周囲に取り付けられた裂・軸など）の裂地や軸先を決めていただいた。

150年前の手紙とはいえ同じ日本語なのに、私が断片的にしか読めないことにいら立っていると、すかさず前田先生が読んでくださった場面が多々あった。坂本龍馬の手紙は数多くあり、活字になっていると聞いたので、修理に少しでも役立つかと思い、本*を読んでみた。坂本龍馬の生きていた時代や龍馬自身の人柄が伝わってくる。ほのぼのとした印象の手紙の訳文を読んでいるそんな時、ふと思い出したことがあった。坂本龍馬に関わるものでこれが初めての修理ではなかったことを。

半世紀近く前のことだ。昭和54年、私が文化財修理という仕事に携わって間もないころ、まだ20代の修理技術者としてかけだしのころであった。京都国立博物館所蔵坂本龍馬資料一括の修理を先輩技術者の補佐として関わったことがあった。

その中に、誰もがご存じである京都の近江屋で坂本龍馬が惨殺された部屋にかけられていた掛軸、板倉槐堂筆「梅椿図」があった。龍馬の血が飛び散り今も血痕の残る掛軸である。通常の掛軸の修理は本紙を表装部分から取り外し、修理を施し、表装部分は取り替えて新調する。そして次の修理までのおよそ100年～150年の期間、保全と展示に耐えられるようにすることが、一般的な修理のセオリーである。

しかし血痕は表層部分にあり表装を取り換えることはできない。この掛軸の文化財たる所以は飛び散って掛軸に付着した血痕にこそある。どちらかというと本紙よりも掛軸全体を保全し、後世に伝えることに意味がある。掛軸全体が修理の対象であり、掛軸全体が文化財である。

掛軸そのものは簡素な紙表具（掛軸の表装部分は通常裂地が多く、茶室にかける掛軸や、簡素に仕立てる場合装飾紙などの紙を本紙の周囲に取り付けることが多くみられる。）であり通常の修理対象と同じく周囲の装飾紙は劣化が進行しており折れたりしている個所も多くみられた。このままではいずれ朽ちていく。展示できなくなる可能性もある。

掛軸は最低でも2枚から3枚の裏打ち紙によって支えられている。小麦でんぷん糊は水で膨潤させることではがすことができる。掛軸全体を本紙として取り扱う。裏側から掛軸両端に走る亀裂や欠損など損傷の著しい箇所を、部分的に裏打ち紙を剥がし、新しい紙に取り換え補強する。地道に掛軸全体にこの作業を繰り返すことにより、龍馬の血痕跡が残る掛軸は次の修理までの期間皆さんにご覧いただける状態を保つことができた。

血痕の残る掛軸（複製）
＝真物は京都国立博物館所蔵

背景にある歴史を謙虚な姿勢で

半世紀前に補佐として関わった修理の仕事とはいえ、いまだに記憶に新しいのはなぜだろう。確かに作品の歴史的な存在感というのか、事実をこの掛軸一幅が具現化している。今でこそ冷静に淡々とした言葉を並べられるのだが、当時はこれが龍馬惨殺を見届けていた掛軸なんだと思うと興奮した記憶がある。しかしそれはこの掛軸を見た人で歴史を知っている方なら同じように感じることである。

私がその時ははっきりと理解できなかったけれど、今理解できていることがあるとしたら、それは私たち修理技術者は貴重な文化財そのものを未来に引き継ぐために修理をしていると同時に、背景にある歴史そのものを修理しているということである。文化財に直接手を下し、修理を行うものとして、あくまでも作品に対して冷静でストイックで謙虚な姿勢で臨まなければいけない。

そのうえで手を加えるのであれば、まず文化財を含めた歴史に対し謙虚であるべきで、文化財そのものには、現代の余計な情報を付け加えてはいけない。この基本をこの時の修理が教えてくれていたと思う。将来この掛軸を鑑賞する人々に掛軸を通して私たちと同じく歴史の事実を受け取ってもらえるような修理をしなくてはならない。すなわち私たちは歴史を修理しているのだ。ということを気づかせてくれた修理がこの掛軸であった。

「修理」と「修復」という言葉遊びをするつもりはないが、歴史を復することはできないし、不可能なことである。修理でよいと思う。「修理」という言葉が私たちの仕事にふさわしい。文化財の本質をとらえ、少しでも長く保存・展示できるように心がけ、意図的な技術は最小限に留め、過度な加飾は控え、そのうえで次の修理の邪魔をしない処置ができれば良いと思う。

*『坂本龍馬書簡集・現代語訳付き』高知県立坂本龍馬記念館

会長インタビュー 子どもたちに もっと 龍馬を！

～「龍馬」と「現代」、そして「子どもたち」～

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 宮 英司 会長

はじめに

今回は、宮英司会長へのインタビューです。長らく中学校にお勤めだったと聞いています。2017年に現代龍馬学会の会長に就任され、この春から4年目となります。龍馬が教科書にどのように取りあげられてきたか・・・等の研究を続けてこられました。また、子どもたち向けの「龍馬授業」についても実績十分だとお伺いしています。現在の本務は一宮幼稚園長さんですが、幼稚園の玄関を入ったロビーには園児向けの「龍馬コーナー」を設置されていて、園内では「一宮幼稚園版・坂本龍馬検定」を実施されているとのことです。

なお、2020年度には、全国中学校社会科教育研究大会高知大会が開催されるとのことですが、この大会では、坂本龍馬記念館の三浦夏樹チーフ（学芸担当）が記念講演をし、宮会長は歴史的分野の助言者をされると伺いました。授業は「坂本龍馬」と「自由民権運動」だとお聞きしています。

（聞き手：事務局 宮﨑＆手島）

一宮幼稚園・坂本龍馬コーナー

龍馬を教えるきっかけ

――中学校で、龍馬の特設授業を積み重ねてこられたようですが、龍馬を教えることになったきっかけを聞かせてください。

中学校で社会科を教えていましたが、高知の子どもたちに「もっと、龍馬のことを詳しく教えたい」という気持ちが少しずつ強くなってきました。それは、自分自身が小さいときに読んだ「坂本龍馬」の本に影響を受けていたように思います。新しい歴史を切り拓いてきた龍馬について、教科書だけでは十分に教えられない。ここは高知だから、郷土の先人についてもっと教えてやるべきではないか・・・。いつもそんなことを考えていました。

高知市教育委員会に勤務していた時に、当時の市長さんが「龍馬都市宣言」をされて、各部局がそれぞれに龍馬に関する施策を練り上げることになり、副読本「小中学生のための坂本龍馬物語」を作成・配布しました。著名な龍馬研究家のご意見を直接いただく機会もあり、大いに勉強させていただきました。（現在も、龍馬記念館等で実費販売されています。）

最後の勤務校では、「中学生版・坂本龍馬検定」を全校で実施しました。また、龍馬の授業を小中学生向けに飛び込みでさせてもらいました。真面目に取り組んだ生徒には、2010年の大河ドラマ「龍馬伝」を楽しく見てもらえたのではないかと思います。そういえば、この年には10回くらいミニ講演会の講師として、いろんなところで龍馬のお話をする機会をいただきました。

――子どもたちに龍馬を教える時、どんなことに気をつけていますか？

龍馬の業績を詳しく教え過ぎないように気をつけています。龍馬が好きになって、身近な図書を開いたら自力で簡単に理解できるからです。それよりも、全国にある龍馬像の紹介に時間を割いています。北海道から鹿児島までスライドを使って見てもらいます。龍馬が足を運んでいない所にまで龍馬の銅像ができている。なぜだろう…と。

この銅像ですが、一宮尊徳を別格にすると、歴史上の人物の中では龍馬が番多いんですね。昭和期は番多いのは板垣退助でした。（板垣が5体で龍馬が4体でした。）平成になってから、急激に龍馬像が増えてきた。新たな観光スポットに…というねらいがあったかも知れませんね。それにしても、なぜ、龍馬なのか…と子どもたちに問いかけます。

子どもたちからは自然と答えが出てきます。「他の人ができないことをしたから」「まわりの人に好かれているから」「人気があるから」「新しい日本をつくったから」等々。どれも正しい訳です。「よく考えたね」と誉めてあげます。この時、子どもたちは龍馬の入り口から、すでに2～3歩入ってきていると思います。なぜ、そこに銅像ができたかを話してあげることで龍馬の世界が広がっていきます。

視覚で訴えプラスのイメージを

――館としても、様々な形で龍馬の出前授業をしていますが、子どもたち向けの授業の時に、どんな工夫をしていますか？

先程来お話ししてきたことですが、歴史に関心のない子どもたちもいるので、社会科の話に深入りしないことでしょうか。龍馬の業績について簡単に触れたうえで、銅像・写真・手紙の紹介へと移っていきます。写真も、当時の人としては驚くほどの枚数が残っていることや未だに新発見が続く手紙のことなどを話すと子どもたちは身を乗り出してきますね。

それと、できるだけ視覚に訴えるようにしています。難しい話だなと思われると頭に入らなくなるので写真やミニチュアの銅像を教室へ持ち込んでいます。実物が一番ですが、実物に最も近い雰囲気のあるもので、龍馬とその時代を感じ取ってほしいと願っています。

――子どもたちへ龍馬を伝える際の視点として、大切にしていることは…？

スーパーマンのような龍馬にせずに、高知のどこにでもいるようなお兄さんの雰囲気で伝えようとしています。それによって龍馬のイメージを損ねようとしているのではなく、子どもたちに「一生懸命に頑張れば自分もできるんだ・・・」といったプラスのイメージを抱いてもらいたいと考えています。また、龍馬愚童伝説も強調せずに、龍馬は子どもの時は目立たない、ごく普通の少年だったという程度に留めるようにしています。

――「小中学生の坂本龍馬物語」について聞かせてください。

高知で暮らしているのに、子どもたちは龍馬のことを意外と知らない。このままではいかん・・・と。そこで、歴史を学習していない小学5年生でもわかる内容にしようという方針を確認し合って、絵本の雰囲気の物語編を前半につくりました。後半は、大人でも楽しめる資料編としました。表からも裏からも楽しめる本、珍しい資料も満載ということで好評でした。現在は、改版（第9刷）されていますが、少し間違いがあるのが残念です。

間違いといえば、最初の完成版に大きな間違いがあって真っ青になったことを覚えています。何と、桂浜の龍馬像の写真が裏焼きされていたのです。校正は何度もしたのですが、真っ黒になったコピーで文字ばかりを追いかけていたので写真の間違いには気づきませんでした。印刷屋さんの素早い対応で完璧に修正されました。記念として、希少な間違い本をわが家の家宝（？）としています。（実は、世間に出回った間違い本は2冊あって、もう1冊はちょうどお招きしていた大学の先生にお土産にとプレゼントしてしまいました。）

――教科書の「龍馬記述」についていろいろ騒がれた時期がありましたが…。

平成元年度に改訂された小学校の学習指導要領社会科では、人物中心の歴史学習が打ち出されました。そして、42人の歴史上の人物が取りあげられ、「例えば、次に掲げる人物を取り上げ、人物の働きを通して学習できるように指導すること。」とされました。その中に、なぜか坂本龍馬の名前が入っていませんでした。その後も学習指導要領は何度か改訂されましたが、この42人の表記は平成元年以来変わっていません。また、当然のことながら、中学校以降の歴史学習にも影響を与えているものと思われます。

今回の「龍馬が教科書から消えるかもしれない・・・論議」は、まさに平成元年度版の学習指導要領とそのことが関わっていると思えてなりません。42人にこだわらずに、もう少し人数を増やしても歴史学習に差し支えはないのではないかと思います。それに、42人の中には龍馬と同じ時代を生きた「勝海舟、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、板垣退助、伊藤博文、陸奥宗光」と7人もの人々が掲載されているのです。どうして・・・。今後の動きに注目していきましょう。

龍馬が残したものを現代へ

――学校だけではなく、成人向けの「龍馬講座」でもご活躍のようですが…。

公民館等から声がかかれば・・・くらいのことですが、次回の6回コースのプランを以下のように練っているところです。

①龍馬と銅像、②龍馬と写真、③龍馬と手紙、④龍馬と女性たち、⑤一度だけの帰郷、⑥龍馬暗殺犯に迫る

タイトルとしては「坂本龍馬講座～お孫さんや子どもさんへの教え方～」としています。龍馬の教え方については（小中学生に教えるに際しては）少し自信があります。それを参加者にお伝えすることで、家族の団欒の場で活用していただけたら・・・と夢のようなことを考えています。

――現代龍馬学会の皆様へ一言お願いします。

会長になって改めて考えています。現代龍馬学会はどこへ向かうのか…と。結構、難しい課題でしたが、次第に難しく考え過ぎないようになりました。そして、龍馬記念館の「企画展」や「幕末写真館」に学びつつ、わからないことは学芸員さんへ質問し、館主催の「連続講演会」で刺激を受け、勉強させていただいています。

会員のみなさんには「龍馬のひろば」でいろんなご意見が寄せられることを期待しています。それによって会が活性化していくと思うからです。また、隔月で実施している例会へのご参加を呼び掛けたいと思います。2019年は、会の重鎮である渋谷雅之先生の「いろは丸始末」が5回開催され、これまでの通説を覆す切込みがたくさんあり、圧倒されました。（例会は、原則として偶数月の第3土曜日の午後2時半から、新館ホールで開催されています。詳細は事務局へその都度確認してください。）

これからも「龍馬が残したものを現代に活かすためにはどうすればいいか…。」について、ともに意見交換をしていきましょう。そして、史実と小説の隙間を埋めていきながら、お互いに楽しみつつ集いあっていきましょう。さらに、子どもたちに龍馬の生き方を正しく伝えていくことにも力を注いでいきましょう。ここまでお話ししてきたことによって、本会のキーワードを「龍馬」と「現代」そして「子どもたち」と考えていこうと思うようになりました。みなさんのご意見をお聞かせください。

宮 英司（みや・えいじ）

profile

高知市生まれ。
高知大学大学院修士課程 修了。
高知県の中学校で社会科教師として
教壇に立つ。14年（潮江中・旭中）
高知市教育委員会に勤務。15年（教育研究所・学校教育課・学事課）
高知県の中学校で校長として勤務。
8年（横浜中・青柳中・伊野南中）
現在 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 会長
高知市立寺田寅彦記念館友の会副会長
高知大学教育学部 非常勤講師
認定こども園 一宮幼稚園 園長
日本教育新聞社 四国版 編集委員

著書

「小中学生のための坂本龍馬物語」
高知市教育委員会 発行（共著）
「NEW放送教育」
日本放送教育協会 発行（共著）
「寺田寅彦銅像物語」
寺田寅彦記念館友の会 発行

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十一）―

物語の歴史性

宮川 禎一

むかし、東京上野の鈴本演芸場で聴いた落語「幾代餅」のこと。

若くて働き者の搗米屋の職人清蔵が錦絵に描かれた美人の花魁、幾代太夫に一目惚れして恋患い。親方は辛抱して一年働いて給金を貯めたら吉原につれていってやるなどとその場しのぎを言うものだから、清蔵は懸命に働いて、一年後、貯めた十五両もの大金を持って吉原に行き、なんとか幾代太夫に会って・・・いろいろあって結ばれて、夫婦で始めた餅屋が大繁盛でめでたいかぎりという噺だ。氏素性や社会的立場を超えた純愛の物語だ。作り話の中でだけ存在するピュアな恋愛だからこそ聴衆に支持されてきたのだと思っていた。

ところが最近、江戸時代の旅日記の解説文を読んでいたら文化十四年（一八一七）の江戸両国に「幾代餅」を売る店が実在していたので驚いた（金森敦子『きよのさんと歩く江戸六百里』二〇〇六年）。落語はまさかの実話だったのだ。幾代太夫がはじめた餅屋は元禄時代とされるので百年を超えて幾代餅が売られていたことになる。

歴史はどんなに冷静に記述しようとも「物語性」を帯びている。事実だけを淡々と書くことは難しい。ひらきなおって物語風に書くほうが読んでもらい易いし真意が伝わり易い。一方、落語のような面白い話は作り話であって歴史じゃないのかといえば、この「幾代餅」のように実際にあった話がベースとなったものもあったのだ。

落語の下げで餅屋の繁盛ぶりがお客の口から語られる。「毎度、ありがとうありんす、なんて言いやがってよぉ。俺ァうれしくなっちまってな、銭を置いて餅を持たずに来た」（中略）「傾城に誠なしとは誰が言うた。両国名物『幾代餅の由来』の一席でございます」（古今亭志ん生『志ん生艶ばなし』ちくま文庫二〇〇五年より）。江戸の人情を今に伝えるいい噺である。

今も墨田区で売られている「幾代餅」。
吉良邸跡横の「両国 縁処」で。

会員の皆様へ　大募集!!

月例会発表者・会報執筆者

当会では偶数月に会員様にご研究を発表していただき、皆様と気軽に勉強をする月例会を行っております。会員の皆様の中にも日頃のご研究の成果をお持ちの方がたくさんおられるのではないでしょうか？その成果を月例会にて是非発表いただきお聞かせ願いたいと思います。全然堅苦しいものではありません。

渋谷雅之副会長のお言葉をお借りしますと「龍馬が残したものを現代に活かすために、歴史学者と一般の歴史愛好者が手を取り合って、ワイワイガヤガヤ楽しく勉強をしよう」というものです。

また、会場である坂本龍馬記念館になかなか来ることのできない会員様には、会報の「私のテーマ」などで発表いただけます。「話してみるかよ」「コラム・龍馬のこと」へは皆様の身の回りのお話や龍馬への思いなど、ほっこりするお話もお待ちしております。皆さまお気軽に事務局までお寄せください。

2019年10月例会の様子。発表者：渋谷雅之氏

●例会発表は1時間を目途にしております。（原則、偶数月第3土曜日 14:30～）
●会報「私のテーマ」1,600字「コラム・龍馬のこと」「話してみるかよ」写真1点+600字 写真なし700字
※今回のみ「第12回研究発表会」のご案内と「例会発表者・会報執筆者募集」

第12回
高知県立坂本龍馬記念館 現代龍馬学会 研究発表会

テーマ　「龍馬の思想と行動」
日　時　2020年5月23日（土）10:00～17:20（会員総会9:20～）
会　場　高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
定　員　100名（参加無料・要申込）

【研究発表】
10：10～　**網屋 喜行 氏**（鹿児島県立短期大学名誉教授（「吉田」本家末裔）
「石尾芳久氏の『海南政典』研究とM.ウェーバーの『官僚制論』」

11：10～　**山本 修 氏**（株式会社便利堂　コロタイプ研究所所長）
「コロタイプ技術で龍馬の手紙を複製する
～100年以上前から続く古い写真印刷技術の話～」

【特別講演】
13：30～ **大石 学 氏**（日本芸術文化振興会 監事）
「坂本龍馬の現代的意義」

【研究発表】
15：10～　**坂本 世津夫 氏**（国立大学法人愛媛大学 社会連携推進機構教授「地域連携コーディネーター」）
「明智光秀と龍馬」

16：10～　**前田 由紀枝 氏**（高知県立坂本龍馬記念館 学芸課長）
「『新葉和歌集』を手がかりに龍馬の思想と歌心を考える」

参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。
【お申込み・お問合わせ】
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会事務局
電　話　088-841-0001　　ＦＡＸ　088-841-0015
MAIL　gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp